神代雄一郎のデザイン・サーヴェイ展開過程に関する研究
―コミュニティ論の形成と発展に着目して―

建築史・建築論研究室　青木 寛子

第１章　序論

研究背景

神代雄一郎（1922-2000）は周知の通り、日本近代を代表する建築評論家の一人である。〔図１〕彼は1967年から「デザイン・サーヴェイ」と呼ばれる集落調査に着手する。〔図2〕一連の調査から得られた知見はコミュニティ論として『日本のコミュニティ』★1の序文及び末文の中に編み上げられ、人間が「どんな具合に集まり住んだら一番いいのか」★2その条件が《コミュニティの適正規模》などの言葉で記された。コミュニティ論は1970年以降の神代の評論活動でも引用され、特に1974年の「巨大建築に抗議する」★3は、これを根拠に組織設計事務所を相手取り、巨大建築をつくり続ける建築家たちを批判した重要な論考である。しかし、神代研究室のサーヴェイはこれまでその全貌は明らかにされておらず、一般的には祭りの調査を通して伝統的漁村集落のコミュニティの社会的空間的構造を抽出したものとして認識されるに留まっている。

そこで本研究では、神代研究室デザイン・サーヴェイの全貌を明らかにし、その着眼の変転を考察することで、デザイン・サーヴェイが漁村から都市へ向かうベクトルを有するものであることを示し、その理解の隔たりを架橋する。そして神代のいう《コミュニティ》がユートピア的なものとしてではなく、非常に脆く、崩壊の危機に瀕する現実のものとして捉えていたからこそ、コミュニティ論や上記論考でその重要性を説いたということを明らかにしていく。

研究目的

本研究の目的は、神代研究室のデザイン・サーヴェイを考えることによって神代雄一郎の思考の軌跡の一端を解明することにある。そのための具体的な目的としては以下の２点を設定した。

(1) 神代がデザイン・サーヴェイに着手する背景と問題意識を把握すること

(2) 神代研究室のデザイン・サーヴェイの展開と着眼の変転を明らかにすること

図１ 神代雄一郎　出典＝『現代建築の再構築』彰国社、1978年

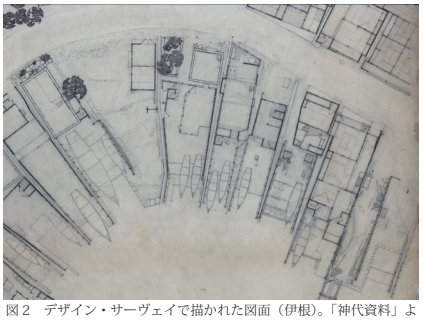

図２　デザイン・サーヴェイで描かれた図面（伊根）。「神代資料」より。部分拡大

研究対象： 本論文では神代の関与した全てのデザイン・サーヴェイと関連する言説を研究対象とする。

研究方法： (1) を明らかにするために、1950-60年代の神代の著作と神代研卒業生らへのインタビューを統合し、彼の関心の変転を通時的に整理する。

(2) を明らかにするために、デザイン・サーヴェイに関連する図面資料の描画対象物や概念図の分析項目から着眼の変化を分析する。なお、これに先んじて「明大建築アーカイブス」に所蔵される図面資料（以下「神代資料」）の整理とデータベースの作成を行った。同時に、「建築アーカイブス研究所」所蔵のデザイン・サーヴェイ図面資料（以下「ＫＩＴ資料」）を統合し、資料分布の全体像を把握した。（詳細は3-1）

先行研究

これまで、神代研究室が雑誌や『日本のコミュニティ』に発表した漁村調査６件に関しては、デザイン・サーヴェイを再評価するシンポジウムや論文によって、たびたび言及されてきた。一方で1972年以降の東京下町調査に始まる都市調査数件に関しては、神代研究室の助手であった松本勝邦や学生が調査結果をまとめたものや各々の関心のもとにその資料を利用した論文は存在するが、サーヴェイそのものを歴史的に評価する視点からは言及されてこなかった。

神代雄一郎に関する研究には高野誠らの研究★4や青井哲人による講演★5がある。これらは多方面にわたる神代の活動領域を暫定的に分類し、それぞれの領域における知見を深めているが、漁村調査にしか言及されていないため、一連の神代研デザイン・サーヴェイの視座について議論するには限界がある。

第２章　デザイン・サーヴェイ前史

第２章では1967年以前の神代の関心の変転を明らかにし、デザイン・サーヴェイが始められた背景を把握する。

2-1 1922～1941年　東京帝国大学入学以前

神代雄一郎は1922年、東京の大井町に父雄三と母カウの長男として誕生する。当初小説家を志していた神代であったが、「今後食うに困らないのは理系である」と諭され、父の夭逝と戦時下であったことも鑑みて旧制東京高等学校の理科へ進学する。しかし、寮誌『大成』★6や雑誌『四季』★7に詩や俳句を投稿していることから、神代の文学的関心は薄れることがなく、むしろ戦時中に流行した日本浪漫派から影響を受けて彼の浪漫的で抒情的な側面は強化されていった。

2-2 近代主義を通り抜けた地域主義

1942年、神代は創設されたばかりの東京帝国大学第二工

学部（通称「二工」）に入学する。戦時中は星野昌一の下で爆撃機から建物をカモフラージュするための色彩計画についての研究を行い★8、その後は関野克の研究室の研究生として近代建築史を専攻した。神代の最初期の論文である「近代建築の起点に関する歴史的考察」★9の冒頭はニコラウス・ペブズナーからの影響を感じさせ、そこでは社会構造の変革や技術の発展の中に近代建築史を位置づける重要性が説かれる。この背後には、近代建築は外国から形式的・表層的に移入されるのではなく、自国の工業力発展の上に自律的に獲得されなければならないという主張が隠されているといえよう。また近代建築論争において、今後のモダニズムの進展の方向として「如何にして近代（資本主義）の建築を「人民の建築」に持って行くか」★10、つまり合理性に偏って人間を疎外していく機能主義の建築をどう人間的に更新していくかを考えることが重要であると主張した。彼は後にコミュニティに根差した地域主義の建築の重要性を説くが、この思想の萌芽はここに見出せる。ちなみに、後に神代は「亡命したあとのグロピウスさんのような感じが、だいたい、ぼくの考え方」★11と述べており、アメリカ亡命後に近代主義から地域主義へと転向し『Rebuilding our Communities』★12を著したグロピウスは神代をはじめ、機能主義建築によって人間が疎外されたと感じた建築家たちにとって一つのモデルとなったと考えられる。

2-3　朝鮮特需によるビルブームと建築家の転身

1949年、新制明治大学の助教授に着任して以降、神代は建築評論活動を開始した。建築系雑誌の豊富化という追い風もあり、「表現の極性」★13などの論考で建築評論家としての地歩を固めていった。終戦直後に誕生したいくつかの建築運動団体は、建築界の民主化を目標に合流して、1947年に新日本建築家集団（以下ＮＡＵ）を結成する。焦土の街に自分たちの手で新たな建築文化を創るという自負が彼らにはあったのである。神代もこれに深く共感し、ＮＡＵの歴史部会で精力的な活動を行った。特に1949年の10～12月に、宮内嘉久（1926-2009）とともに主催した「日本建築運動史講座」（全10回）は戦前からの建築運動で活躍した建築家たちを招いてレクチャーを行うというものであり、神代たちの熱の入れようが伝わってくる。しかし、1950年6月に勃発した朝鮮戦争によって、日本にわかに好景気が訪れ、建築界にも一大ビルブームが起こると、かつて「建築界の民主化」を共に謳った建築家たちは、次々と商業主義を表象したような建築をつくっていった。その熱気と反比例するようにＮＡＵの活動は下火になり、1952年の初頭にＮＡＵ本部事務局は消滅した。ＮＡＵの挫折に加えて、不安感論争などでも民衆と建築の乖離に対して開き直るような態度を取った建築家たちに対して、神代は不信感や苛立ちを募らせていった。

2-4　アメリカ留学と開拓精神の発見

1965年、神代は明治大学国外研究員、ジャパン・ソサエティー・フェローシップとして1年間のアメリカ留学へと出発する。この頃、日本の建築界への不信からスランプに陥っていたと彼はいい★14、そんな日本を脱出する意図もあったと推察される。彼はニューヨークを拠点に、ミシシッピ以東の都市や中小集落を旅行し、中でもピルグリムの到達した東海岸の集落や、そこから西へ開拓を進めたシェーカーの人々の村に強い関心を示した。そしてアメリカン・デモクラシーの根底には大陸東岸に入植して以来、定着・分裂・拡大を繰り返した人々の独立開拓の精神に基づく、自分たちで社会をつくっていくという強烈な意思が存在することを直観する。〔図4〕

図4　アメリカでの神代の足跡。出典＝神代雄一郎『アメリカの環境――都市・建築・芸術』井上書院、1971年に筆者加筆

2-5 独立住宅からコミュニティへ

これらの問題意識の傍系として、1940-60年代の「住宅」に関する彼の業績や論考を辿ると、神代が独立住宅から住宅「群」へ、そして秩序立った「集合の条件」へと関心を拡大、深化させていったことが明らかになった。

第３章　デザイン・サーヴェイの展開過程

第３章ではデザイン・サーヴェイにおける着眼の変化を明らかにし、神代のコミュニティ論がどのように構築されていったのか通時的に考察する。

3-1 デザイン・サーヴェイの全貌と関連資料の基礎研究

筆者はまず「神代資料」と「ＫＩＴ資料」からデザイン・サーヴェイの全貌を明らかにした。また、神代研究室のデザイン・サーヴェイは後に助手の松本勝邦に引き継がれていくため、インタビュー★15から神代の関わった調査のみに限定した。

その結果、神代は1967年から1979年の期間に全11回の調査を行い、対外的に発表されたもの以外に1973年に東京下町、1976年に小浜、1979年に角館で調査を実施したことが明らかになった。また、「神代資料」に631点、「KIT資料」に94点の図面資料が存在すること〔表2「神代資料」「ＫＩＴ資料」〕、描かれた内容ごとに図面の量的分布を検討すると、〔表1〕のようになることが把握できた。

3-2　デザイン・サーヴェイの転換点

調査対象地ごとに特徴を整理していくと、沖の島調査で対象集落の人口が顕著に減少していることが分かる。そこで、1977年の時点で書きおろされた『日本のコミュニティ』ではなく、調査ごとに発表された雑誌資料を辿ると、神代のコミュニティ論の軸となる《200戸1000人》というコミュニティの適正規模の指標は1970年の菅島で発見されたもの

であり、これに「コミュニティは内部に40～60戸ごとの《組》を持つ」、「《奥宮―里宮―田宮》という信仰軸を持つ」などその条件を加筆するようにコミュニティ論が構築されていったことが明らかになった。また、角館では「角館町保全・整備・開発計画のための基本的な調査報告書」★16が記され、実際に行政に対する提言が行われる点でそれまでのサーヴェイとは異質である。そこで次節以降では神代研究室の全調査を、コミュニティ論を軸に３つの期間（①形成期②検証・発展期③実践期）と位置づけ、各期間の着眼の変転についてより具体的に把握していく。〔表２「コミュニティ論」〕

3-3 1967-1970年　コミュニティ論形成期―《女木島・伊根・壱岐・菅島》

【形成期】では辺境の漁村集落で調査が行われ、《コミュニティ》が内包する空間的・精神的なシステムについての分析が行われ、《200戸1000人》がその適正規模であるという《コミュニティ》の単位性の発見があった。第一回の女木島調査の概念図★17を見ると、幟や提灯の位置をプロットしたものや、行列の順序を記号的に示したものなど祭礼に関するものが中心である〔図5〕。幟や提灯はタテワリ組織（組）の地理的分布を可視化するものとして、行列はヨコワリ的組織（世代ごとの役）を体現するものとして扱われたことから、集落の空間構造・社会構造を結び付けるものとして、これらに着目したことが把握できる。

第二回、第三回の伊根調査と壱岐調査の概念図には、祭礼だけでなく漁業の中心的役割を担った有力家族の家の分布と

表１　資料分布図

	女木島	伊根	壱岐	菅島	沖の島	十三	東京下町	西条	引田	小浜	角館	
平面図	6	4	2	3	2	2	6	2	0	3	6	
連続平面図	21	5	4	5	0	2	7	5	4	0	0	
集落全域連続平面図	0	0	0	16	22	58	0	0	0	0	0	
断面図	5	2	2	12	3	4	6	6	2	1	11	
連続断面図	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	
立面図	1	1	1	0	0	0	5	9	1	7	9	
道路立面図	8	0	0	0	0	1	15	2	0	0	0	
屋根伏図	8	0	4	0	2	6	6	2	0	2	8	
連続屋根伏図	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集落全域連続屋根伏図	0	0	0	18	0	5	0	0	0	0	0	
民家配置図	2	7	5	1	1	1	0	7	0	0	0	
プロット図	0	8	1	2	0	6	15	32	0	11	4	
ダイアグラム	8	8	2	4	17	2	1	3	0	0	1	
集落全体連続地形図	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	
スケッチ	0	0	0	0	2	0	3	3	0	2	1	
アクソメ	2	3	2	1	5	2	3	1	0	2	0	
アイソメ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
パース	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	3	
調査指示図	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
テキスト	0	0	0	1	2	0	6	3	0	0	0	
地形図	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	
都市計画図	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
普通地図	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	
古地図	0	0	0	0	0	0	7	9	2	0	0	
その他情報地図	0	7	1	4	0	5	6	9	0	11	0	合計
延べ図面数	63	47	25	69	66	94	87	95	11	39	43	639
「神代資料」点数	64	50	25	126	56	108	56	95	12	39		631
「ＫＩＴ資料」点数				1				53	11		29	94

表２　調査対象集落の特徴

集落名称	調査年	対象地の属性	コミュニティの種類と状態	生業	人口	戸数	コミュニティ論
女木島	1967	漁村集落	単一漁業コミュニティ	酪農、漁業	990	204	形成期
伊根亀島	1968	漁村集落	単一漁業コミュニティ	漁業(刺網)	926	196	
勝本浦、正村	1969	漁村集落	単一漁業コミュニティ	漁業(捕鯨⇒網漁)	1601	322	
菅島	1970	漁村集落	単一漁業コミュニティ	個人漁(海女)	1180	193	
沖の島、弘瀬	1971	漁村集落	単一漁業コミュニティ	半農半漁(漁業衰退)	**400**	144	検証・発展期
十三	1972	漁村集落	肥大し、結合した2つの単一漁業コミュニティ	漁業(シジミ漁)	984	250	
東京下町、南千住八丁目	1973	都市	肥大し、分裂した離散型農村コミュニティ	勤め人	4317	1062	
東京下町、佃島		都市	単一漁業コミュニティ	漁業→勤め人(築地)	1083	256	
西条	1974	都市	肥大し、結合した2つの単一商業コミュニティ	商業(酒など)	調査対象地のみの人口は不明	約400	
引田	1975	都市	1つの漁業コミュニティ、3つの商業コミュニティ、1つの塩田コミュニティ	漁業と商業(酒と醤油)	5093	1342	
小浜	1976	都市	「同質なコミュニティ」とのみ言及された	記述なし	6592	1927	
角館	1979	都市	記述なし	商業	16906	4521	実践期

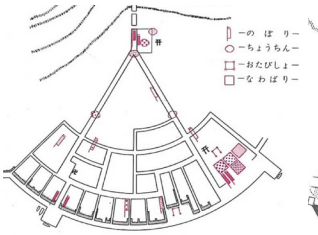

図５　幟や提灯のプロット図（女木島）
出典＝『建築文化』1968.7。部分拡大

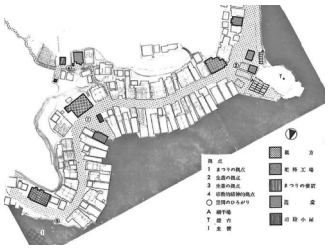

図６　祭りの拠点と有力者の家の関係（伊根）
出典＝『建築文化』1969.6

広場の位置関係についての分析が加わる〔図6〕。特に、壱岐はかつて捕鯨で栄えた土地であり、単一家族だけでは成立しえない漁業形態と調査当時まで継続する支配関係、水利権にも着目した。また、何棟もの住戸を連続させて描いた平面図以外に個別の民家の構成や民家の内部空間と集落全体の関係が検証されることから、個別民家と集落全体の空間的接続への関心が伺える。

第四回となる菅島調査では、初めてＡ１サイズのトレーシングペーパー21枚に渡って集落全域の平面図が驚異的な解像度で描き切られ、写しとることそのものへの迫力が増していった。〔表１「連続平面図」「集落全域連続平面図」〕このように、十三調査までは残存するコミュニティを内包した辺境の集落を、その形状や生業形態の条件に関してマイナーチェンジを繰り返し、祭礼を軸に膨大な分析をしていったことが把握できる。〔表２「生業」〕また、【形成期】の調査集落の共通点として、土俗や朝鮮系の潜水漁労民族の開拓と定着に由来することが抽出できた。ここから、神代のいう《コミュニティ》は彼がアメリカで発見したコミュニティがモデルとなり、神代はアメリカン・デモクラシーの根底に存在したようなコミュニティを、開拓と定着の歴史を持つ日本の漁村集落に求めたのではないかと推察された。

3-4 1971-76年　コミュニティ論検証・発展期―《沖の島、十三、東京下町、西条、引田、小浜》

【検証・発展期】の調査地は【形成期】よりも十三を除いて極端に人口が少ない / 多い点に特徴があり、これらの対象地は神代が内的秩序を分析してきた理想的なコミュニティを内包する集落とは同一の像を結ばない〔表２「人口」〕。

第五回、第六回の沖の島調査・十三調査では200戸1000人という安定期を経て、過疎という異なる位相へ向かう集落へ目を向け、コミュニティが崩壊へと向かう動的なメカニズムを捉える。概念図では辻の位置や、雑貨屋の分布が調査され、《組》以外の住区の形成方法に着眼している。さらに、沖の島では軸性の強い概念図群が描かれる。これは、景山春樹の著書『神体山』★18から《奥宮―里宮―田宮》というコミュニティ

を支える信仰軸の概念を投入したことの影響と捉えられる。コミュニティを精神的に秩序立てるものとしての祭礼の位置づけが明確にされたといえる。

第七回の東京下町調査ではこれまでの漁村集落から一転して荒川放水路と隅田川近傍の高密化した下町を対象に調査が行われた。概念図は描画方法に変化が見られ、極端にスケールが階層的に描かれるようになる。また、沖の島や東京下町調査では住戸と道の関係の抽象化され、寸法が並記されるようになり、これらを生活空間の計画学へと還元しようとする視点が読み取れる。〔図 7〕〔図 8〕

3 年にわたって過疎 / 過密に晒され、瀕死状態のコミュニティを見てきた神代であったが、続く西条・引田・小浜の 3 調査では《コミュニティ》の《結合》の可能性を見出している。これはつまり、《コミュニティ》が内部の秩序を保持したまま《分裂》と《結合》によって拡大していくということである。そして過疎にも過密にも陥らない魅力ある《都市的な最小生活圏》は、どうつくればよいかという問いを、コミュニティ単位の《結合》方法の探求へとして捉え直したのである。

以上から【検証・発展期】では神代が思考の枠組みを拡張し、《コミュニティ》を単位性を以て完結するものではなく、人口の流入や流出によって《分裂》や《結合》というダイナミックな変動を繰り返すものとして認識しようとしていることが把握できる。一方で、図面資料を見ていくと、俯瞰的な視点の獲得とは裏腹に西条・引田調査の実測対象範囲は醤油や酒を造る旧家が多く立ち並ぶ範囲に限定され、小浜では連続した平面図は「神代資料」と「ＫＩＴ資料」では確認できない。また西条では視点から、十三集落までの実測調査のように集落全域を全て描きとめる熱量や執着は感じられなくなった。また西条・引田では立面図が増加し、平面図と同様に旧家が描かれる。またファサードの改造状況によって決定された「保存度」を指標として建物をプロットした概念図や、がったり・格子などの町並みを構成する表層的要素を抽出した建具が描かれたことから、「町並み保存」への関心の高まりがあったのではないかと推察された〔図 9〕。

3-5 1979 年　コミュニティ論実践期―《角館》

角館調査では「角館町保全・整備・開発計画のための基本的な調査報告書」が記される。これまでのコミュニティ論とサーヴェイの手法を展開させ、角館町（行政）へ提言を行っていることから、コミュニティ論の実践過程と捉えられる。

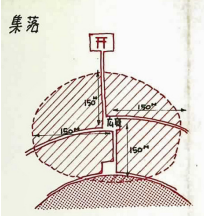

図 5　住区と広場、道の広がりを示す概念図（沖の島）。「神代資料」より

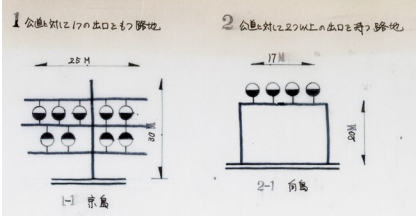

図 6　路地と住戸の接続関係を示す概念図（東京下町）。「神代資料」より

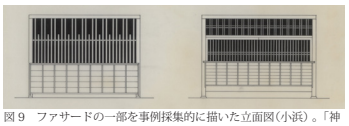
図 9　ファサードの一部を事例採集的に描いた立面図（小浜）。「神代資料」より

図 10　山車動線の観光ルートへの応用提案　出典＝前掲「角館町保全・整備・開発計画のための基本的な調査報告書」

同報告書には「（角館の 3 つの拠点を結ぶ道は）秋の祭礼時に用いるルートと重ねて、角館市街地区のバックボーンとし歩行者優先の道として沿道の整備計画を行なう」★20 とあり、山車の行列の動線分析を新たな観光計画の重要観光ルートとするなどの応用が見られた〔図 10〕。

第 4 章　結論

本研究を通じて得られた知見は以下の通りである。

神代雄一郎がデザイン・サーヴェイに着手した背景には、終戦直後に「建築の民主化」を謳いながらも、積極的に商業主義の開発に「動員」されていった建築家たちへの不信感と苛立ちがあった。そこから脱出する意図で向かった 1 年間のアメリカ留学ではアメリカの民主主義の基盤に開拓精神に根差す《コミュニティ》があることを発見する。そこで、アメリカと同様に開拓と定着の歴史を持ち、自立自活の生活を営む辺境の漁村集落の社会空間構造を抽出することで、日本における民主主義の基盤となる《コミュニティ》の構造や性格を建築論の基盤に据えるためにデザイン・サーヴェイに着手する。そこには安定した《コミュニティ》の内的秩序の微細な分析によって単位性という視点の獲得へと到る過程と、一段枠組みを拡張し《コミュニティ》を肥大→分裂 / 結合の動的なメカニズムとして把握することによって、コミュニティの単位性が都市へと発展させていけるのではないかと思索する努力の痕跡があった。以上から浮かび上がってくるのは、ユートピア的な《コミュニティ》を探求する者としてではなく、脆く崩壊しつつある《コミュニティ》を懸命に追いかけ、現代の建築家たちに職能の在処を提示しようとする神代雄一郎の姿である。

脚注 / ★ 1『日本のコミュニティ―その 1　コミュニティとその結合』明治大学工学部建築学科神代研究室編、鹿島研究所出版会、1977 ★ 2 前掲『日本のコミュニティ』p.8 ★ 3 神代雄一郎「巨大建築に抗議する」『新建築』新建築社 1974.9 ★ 4 高野誠他「神代雄一郎の諸活動と思想的特徴について―神代雄一郎の建築論的研究（1）」『平成 16 年度日本建築学会近畿支部研究報告集』、2004、pp.1133-1136、同「神代雄一郎の諸活動と思想的特徴について―神代雄一郎の建築論的研究（2）」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、2004、pp.595-596 ★ 5「基調講演 2：神代雄一郎、その批評精神の軌跡」（「10 ＋ 1」ウェブサイト　201306 公開）2013 年に明治大学の主催した展覧会「建築家とは何か―堀口捨己、神代雄一郎の問い―」にともなう記念シンポジウム「建築家とは何か：堀口捨己・神代雄一郎の問い」（2013.4.23）の内容が「10 ＋ 1」ウェブサイトにまとめられたもの★ 6 東京高等学校大成寮図書部『大成』（第 17 号 1940）明大建築アーカイブ所蔵★ 7 昭和 18 年 2 月号、同 9 月号には佳作入選している。『四季』四季社、1943.2、p.57. 同 1943.8、p.55 ★ 8 松崎照明（神代研究室最後の博士号取得者）へのインタビューより。（敬称略）★ 9「近代建築の起点に関する歴史的考察」『大会学術講演梗概集』1948.3 ★ 10 神代雄一郎「近代建築研究の現代に於ける二つの課題―浜口・図師両氏の論争を中心として」『新建築』新建築社 1948.7-8 ★ 11「建築家の戦後責任」『燎』宮内嘉久編集事務所編、1995.10、p.75 ★ 12Walter Gropius『Rebuilding our communities』1945 ★ 13「表現の極性」『建築文化』1958.7 ★ 14 神代雄一郎『コミュニティの崩壊』井上書院、1973、p.5 ★ 15 松本勝邦、佐藤由巳子、松崎照明へのインタビューより（敬称略）★ 16 明治大学工学部建築学科神代研究室『角館町保全・整備・開発計画のための基本的な調査報告書』1979 ★ 17〔表 2〕のプロット図とダイアグラムをここでは概念図としている。★ 18 景山春樹『神体山』学生社、1971 ★ 19 前掲『角館町保全・整備・開発計画のための基本的な調査報告書』p.19